

遲月庵句集

單



ま月上人の録
上人の書
後
此
後
四
ぬ
あ
知

の奇後をさるる多しといは
りてはるるをさるる多しといは
候しはるるをさるる多しといは
候しはるるをさるる多しといは
候しはるるをさるる多しといは
候しはるるをさるる多しといは
候しはるるをさるる多しといは
候しはるるをさるる多しといは

右新亭
素玉識

二年前上人齋の隨聞録

五



康修

神の所山方教西丁於くお錦
とを居るうやし天工の一文は
観何ものうは是れ對し何ものを
是れ子あるをいんや

これ候ありし八志すす跡跡の山
千里を往もなきかすす
山おとほる必の是れ候の極なる

若しはるるをさるる多しといは
候しはるるをさるる多しといは
候しはるるをさるる多しといは
候しはるるをさるる多しといは

ふ花は思ふも成もあはれ
ちる花の初ハありあり念佛のや

大瓢漬

瓢を煮る

所哉の合名得細言此おもを唆せん
しけ急の後の使いあまを
あまをいへ

飛ぶくんとよきる此一世界

庚戌年旦

うらなひ縁起の空とむらさ
き水の必ありかき
松竹やまにまゝに好む
あまをいへ里の名をいへ

多岐やまも積ふらうへ
東をやまに終りて
連翹の成を積り
塩竈のまや柳の煙
るる又水や春の山
あやや松やまをいへ

只五老山中

ふよこよんをいへ
ふよこよんをいへ
松のふ
あまをいへ
あまをいへ

隣子とれ梅可る朝の二月月
初午や考るを考る店の新の有
枝の垣ほの白ひよめら一
枝のいのちををををををを
梅がむらやさしや逆さる
佐堂り娘中やしよあを
よろんをいぬ娘を此ををを
増筆の神社奉納二月月
けまふの神さのぬひしを
千一降のかわるうちと想せし
ふその神も思ひ出さるる
志をくは施をををを

かしとある枝よきし春の風
あかき口のををし雛子のあ
赤畑をるぶさくをの脚りの
乃おや小まきり下りけ大根
を花梅よあま
画子又るやまのをををを
二月あり二三子と伴ひつ笑
かりちをにむらひく梅の
下にははあを
けあ子考るを梅乃
まの母二
はうの梅ハ酒をををの

春の月ありは春の月ありは春の月あり

孫魁

春の月ありは春の月ありは春の月あり

梅の二つ

二の月や梅の枝は色少あはれし

水船の梅まきし

梅の枝は色少あはれし

けしき少い梅はし

梅の枝は色少あはれし

梅の枝は色少あはれし

梅の枝は色少あはれし

梅の枝は色少あはれし

梅の枝は色少あはれし

梅の枝は色少あはれし

梅の枝は色少あはれし

梅の枝は色少あはれし

梅の枝は色少あはれし

梅の枝は色少あはれし

梅の枝は色少あはれし

梅の枝は色少あはれし

梅の枝は色少あはれし

梅の枝は色少あはれし

梅の枝は色少あはれし

文よりぬの古稀の笑羽を
面をく如松原しつる子文

あゝ響くしこる身よ

けきよよあゆる世せしり者の上
壬子えり江の流りゆく

えりよよ富士つんる龍の妻のち
初日新いあもまきのわ我たらん

海客の伝言

弟の妻の春よく侍るる世の下
を伝八京

物あよあのくあはるるんは
松田

住くおくさくおのりあはる

ふ川

汐のりや纏よ海客はむ夜を

春の海大あきあの日をうあを

川あの子はささく春の海

遠帆眉をけしきあは物

春の海を井よ志はあはる

船月色あはるるるるるるる

又るやそはあはるるるるるる

蕙のあはるるるるるるるる

まゝあはるるるるるるるる

差をむ梅小投打其名あは

小山崎う中しるもて天玉守

暮をゆくはなやしの

天衣をゆくはなやしの

すれはあまの山子なとよ

借されく隅田川よあをほしぬ

川はくやゆる年ぬきを 耕

温祭あや

葉をゆくはなやしの

留別

ある秋のあれはやりの

きよ原あふあつとと

雲子ゆく鳥を指すすつりのあ

上野うと

年々あつとと

去年あつとと

あつとと

あつとと

あつとと

あつとと

あつとと

あつとと

あつとと

あつとと

喜柳とらふ川のほろひを
水戸のふらふふあるまじき
茶木の茶乃ををんめりれり
お志ききつ人の友城と志
里よかかんれおんといひ
茶木の茶のまふや白む一き他

扇の曲

扇の橋三をかさうもあ
めし月と画よおてあま
移らふんも人ああ
かききりい
東さうやま石の里あ

歌名

いとくさくさよし方のあ
きたにうらめし人のん
うみをななくさむとさうのあ
あまさと女梅志のふあやあまら苗
あふるあを陵うあまあ
てし松并の中の有あ
花を西く正印のあ
川流渚有うまともあられ
川扇やああ情む人の侍とら
碧石相伝まあふけ殿のあ
名ありしる古碧石の
碧石のあ
ここを
あ

上巳

捨つ志しぬや 雑の殿 遠く

去年の老 布う江 戸子有と

初うて 俄子 笑ひ 幸ひし

再月う 暮ち 子 ぬを 手向く

春をし 木ありしと 泣 塚の 子

山家

け 中 閑を 花 榎の 木を ぬ

の づ しく 川 飾り と す ぬ

月 糸を いく 世 四季の 人の 門かき

言 返つ あ しく しく じし 春の 子 耕 春

いら ありん 接 穂し 通 不 悔の 道

毎を 衰 事 往

若 新や 流 しく 流 子より 遠く

能 若や 日 課 しく んと あり ひ しく

能 若く や 是 しく しく 能 子の 情 ありし

い きと した の ち あり と 笑 あり 春 の 春

そ あり 結 房 あり 春 の 花 母 笑

雨 あり しく 枝 枝 増 しく 春 の 春

梅 あり 春 あり 春 あり しく あり 春 あり

天 仰 しく 舞 舞 あり しく あり 春 あり

春 あり 春 あり 春 あり しく あり 春 あり

春 あり 春 あり 春 あり しく あり 春 あり

春 あり 春 あり 春 あり しく あり 春 あり

急のそと時 珠粒散 招く 舟ひきり

まゆ 舟は 時一し 木如きま

舟の画をうけしを や 懐く 古きま

神曲 辰の 辰

春の 春の 春の 春の 春の 春の

まほを 出さる

出さる 神の 舟の 舟の 舟の 舟の

まほを 出さる

羽つと 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

指 舟の 舟の

世の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

ら 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

舟を 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

一 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

に 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

くろい梅の鶯の床に啼きをせむ

く日

若菜ゆふををかきに倦りわび

一仏法界しく一人といふ

佛頂梅分の一袖のまを

春のあまを梅よりゆくと鶯のま

郊外

らんまぐのあところろろ入の雑子の夢

みおる梅やそれとゆえす梅白く

世の中いささか此あう鶯よ

呆座よ名のあうたるはらうらひ

ぬをやあうらひのあう鶯よ

酉申未午巳辰卯

寅の刻をかりよやをう起あう

若鶯やあう鶯よさうう鶯

横やあうのまをさす日のおひ

日糸の珠を梅よりやあう鶯

鶯やあう向えハあうあう鶯

唱食の板を梅のうら中あう

嘆あう梅よりあうあう鶯

つそやあう夕菜さうう鶯

風をのあうあうあう鶯

あう梅よりあうあう鶯

春丸のあうあうあう鶯

あうやあうあうあう鶯

福もらん金もやあふむまての程を
旅も先のかしし葉のふんを
角の白や身もりの根の枯もせず
石の砂や散る秋もとり深ふ柳
新緑も物地し少松のふりし
初午や瑞籬を越る里亭

文はくぬくの道し
涅槃のや丁好し田の夕を
龍波根の雪消えく辛夷咲く
雪もや門見入せは修馬
在玉茎上葉除の布のそ下ちる
夢のうりやし接穂の梅のふん

梅候やかろ元果さる鶯の
夢のよあきく水もあつた春の
我とく川杖はくかふん
雪もや耳のりり
ちりや去年のゆりたる
え路よく庭や志とらふ
美物や菅草の株のふり

乙卯の春

南都の名えりたらしし
をく都の美を初ふ
春のよあややすく
うをくふし伸よ

石女七娘のやうな腰くきささくは
くまきよ木やまや一延の腰のふり
腰の月一歩の家陰ふくくるも有り
春の月一歩の家陰ふくくるも有り
腰をよま腰のふりを持座のつ
座の一間子数親のあを
腰くせさうへたきささくの
あををさうへたきささくの
あをのたよりしうへたきささくの
この字鏡座よはを向ひ
く又あをあらうめさうへた
せとのせくえも人も年へ

字あお同くまきささくの
あををさうへたきささくの
あをのたよりしうへたきささくの
この字鏡座よはを向ひ
く又あをあらうめさうへた
せとのせくえも人も年へ

あやま友三とら務きあふのまやま
初まの初音のまきあふのまの
あををさうへたきささくの
あをのたよりしうへたきささくの
この字鏡座よはを向ひ
く又あをあらうめさうへた
せとのせくえも人も年へ

のちよきあつすわりのみね
ゆかたさかさをめしゆく
家を知れり田舎者長上
虫しゆくめき出もる白
くもを番しゆく
られよまきしゆく
おあも豆飯のあつゆ
平くかきゆくそ白のゆ
ゆるぬくの判の初をよ加
ゆる

よきあつすわりのみね
田舎者長上
虫しゆくめき出もる白
くもを番しゆく
られよまきしゆく
おあも豆飯のあつゆ
平くかきゆくそ白のゆ
ゆるぬくの判の初をよ加
ゆる

子秋 美草 福深 夢

これかたは良辰列のゆき

破魔の二柱ハリし梅老の

歯をむし無小人あり春の

而二日梅の大会のきき

室の府屋と廟系信なる世

ぬれこやる志ハし梅の枝

たむら

一初らもかしゆく梅の雪

所思

梅の雪の思ふ日或は白

梅の雪の思ふ日或は白

春の月
人の情の思慮かけりり春の月
日の影の牛とり伸く春の月
万の影やか清きあけさる栗の球
百やあしやあけさるの月の梅
黄たふふ列衣らきしものさふ沙
然あのみまや積るをを
福もん今や梅も志川海る意ん
瓶も添く風もあしや春の月
糸も中り祝の中の世界のあ
信保婚の話の長きよりの花
余哉や柳あり流るりり
坂

金甲叱

春のあや柳の生さありく人
種并そで池の末のちと花咲く
あゝ新の庭あをこんを
富士よそを清ぬ名ハ何れを柳
柳のりや芳なる橋の 繁人 望
上巳玉造文彦印とて
存らんつらむの雛を何少可
ららほをし利根の交
芦千とる侍と叱くは
川を北流せしうそきとり
さちのく舞さちのるり
ひまを破り命を空の垂し

と路のやまよ高柳を加へる
と一し好まきくおらの旅を

南ささるるし

旅千と勢利根の若の身が被す

占せ

あまのうへ川あるさめ 是迄の如

我と合はんととまされし

与一人四川あふぬのあつぬと

御まきしし家のたふしと

くくそ運の旅よおもひ

とちぬるおかき 海をの勢よ

なれハえ丈和路より印を

むけ伝ふものハ方外多々士

は行三人

世の中のよりし地をさめそ運哉

井戸のたのちのめを指さる柳

池のたれしとるの徳子ちりか

初の地よちあみちあふも指ん

さや つまの荒とくさきさあ

梅のや楚辭のくつんの文のれ

との南のやの沙のむの家のあのけのし

旅ハのさのとのるの外のの

梅のとのまの是のとの朝のの

麻の乃のむの比のやの古の枝のの

春の夕日燈をあげく松をば
牛の葉を〜ぬる人なり梨の影
花持ぬを里にまじし志 千
り春を枝子はく〜人さ惜〜り
サ〜ミウナライキヤイホウカイ
いふ春子〜踏〜耕芽のま〜りぬ
恨を〜〜〜〜〜秋の雨
君の来福ハ何や〜た〜す京の路
酔る師君泉氏六十笑
春よ千枝海ふ京の〜〜〜
只る路亭ふ
り春や机よ〜ぬる 不 狂と〜り

春の春浮世の春記居付ぬ
春あ〜ん〜子〜は〜村巴と
いふ名を〜〜〜
法るやなれも西巻村の萌
ま〜ん〜ち〜あ〜を〜原〜
隙の路靴赤き春の〜し〜
一葉よ多きは死をの〜し
山を〜〜〜下〜誠の〜と〜人
おも〜く〜れ〜死〜は〜後〜を〜
途〜な〜ん〜く〜れ〜山〜路〜を〜
山〜新〜し〜ん〜庭〜お〜乱〜は〜回〜向〜七
ら〜も〜と〜な〜く〜と

り秀や羽をとりて人をも愛
有せし御所院佛

右より見へてはるの事し

回文

友の名は知くはうをりし名の本

高松氏老母六十賀

花の香かけて老の松久し

其の日は花流ちれく花流し

西郊の鳥もころめく彼をみる

二代目の妻高松の事し

高松

千代の事を控する。此より千代

文書く高松を画く

高松は浪よきや二尺の妻高松

或云高松の候

高松の妻は高松の妻

生るるよ高松の妻

高松の妻は高松の妻

高松の妻は高松の妻

高松の妻は高松の妻

高松の妻は高松の妻

高松の妻は高松の妻

高松の妻は高松の妻

高松

つ雲の糸糸を月のもりーめり

号名代の島一平をうりあふ

〜杉形樹のよきを言ー奥不

夫りぬく正平を治ー三つめ文字

懶肝丸十二折月腐一折

則他一折更新循環歳

更故諺曰人心象膽世

事懶肝

若やくや梅福さ江の懶の肝

ちる乳せし脚もめ筆就

を恨〜 岩端 秋加也

梅〜〜春のまきり 加 文ま

瑞和組の羽織守のや春の雪

二味は鳥のめぬ〜 梅もや春の雨

甲知り了山陽のふゆり〜

人語の科を記梅もる目り風

即ち不毛ふ冠を〜

去不此れやをより〜のいろの母り

梅をる日如ま山よせりこ

山を庭の跡を止す

去る〜穴を〜見よ〜梅

能るの修や去砂を梅ふ矢根名

〜〜あ〜連理を梅んを把さる

昔もふくきんとくまふ
井割り紙よりつけく見
せ八あやしく庭をささり
くたさくさくハヤをあも親や
さうかしくちめえのられを
来かくせり

紙をばさる人考級り多きみ
糸より水の委新ぬ其のる
糸福や老は夢を移る
糸梅子澄け昇持の春の水
江井七老子歌く
今山を語れ矣らん里の海苔

東宮を考ふより

昔よ希のころの竹は梅く
玉娘のふねるをよふ
るのほろいしと御語の
心なふねのわんたさく

乙卯の初〜そのまに井の
庭の柳を

梅〜晴し昔の梅ふつる柳
昔を考ふを画くは真

昔を考ふや種のみ実を昔の
齒のそ志む古き名でその
老松老松

若ぬよの木の命新や 若る果より
〜の神によきいなるよ

中を流るる人よ

初冬の雪をさそりゆく
より解は花も若る果の 彼をうか
悼の夕ををぬ

更ぬ梅は散しとゆへは 梅し
そ実さやあを悠まや〜 梅り〜
長におりおや 柳のむ〜
柳のうやをうとさ〜 柳 雲信
梅香の〜 月を〜 了ら
雨ノ梅をる

みやん風あきるの あつた
よ〜や〜とあひさ〜
〜く〜ゆ〜と雨のゆ〜 梅

大なる

さのき〜とあゆめ 梅やあけ
さのき〜とあゆめ〜とさ〜 梅
大なる

面山や梅梅の 木の芽は味
梅梅の味

梅の味やあつ〜とむか〜
梅の味やあつ〜とむか〜
梅の味やあつ〜とむか〜

ふとまきばをゆくまきばりの
潮のなるといふ掛あふせんも念ふ
御まきばりぬとく又味う母の
信くたふとくあふまきばりし
や打あふをたふとく一雨の
のほろろよまき

法あや打あふのほろろ 神中打

抄録

ふとまきばりぬとく又味う母の
御まきばりぬとく又味う母の
信くたふとくあふまきばりし
や打あふをたふとく一雨の
のほろろよまき

是種抄の傳ハ習つて田あし

習あつた

是種抄の傳ハ習つて田あし

法一人画賛

去つてくるといふん知しし 馬出様
あんとくく焼ああししあれ雲
潮のなるといふ掛あふせんも念ふ
御まきばりぬとく又味う母の
信くたふとくあふまきばりし
や打あふをたふとく一雨の
のほろろよまき

をきし

物りぬふるをす 庭のそらに
あけはるる花を飽く池の細細
あれはるる花を伸く萩のあやめ
柳橋の流れ一花をり田や一
八方を改く啼るるとあやめ
日一あやめを改く花ををり
梅こを改く買はるとあやめ
早りと早耕早くと早志
うもはるる花をのあやめなり
りあハ
耕せもぬるる花をのばくし

素子為袖幸とてふ
あやめをり

声 何やとすも出れはるる

三月

おきあやめをり 絵を改くあやめ
年月やあやめの幸の 花をり
あやめやあやめの幸の 花をり
梅橋や月代まきき 梅
あやめの花をりあやめをり 梅
あやめをりあやめをり 梅
あやめをりあやめをり 梅

かゝるいふ人々の世の行の仲
うのりかゝると極まると云はるの傳。
ほろ碁の吹の吹りや春の風
誰の心を芥福をまのめの交
春風しはしは風の吹せり
大ね小知え四のハ蓋まらぬ
る時や物客もやさしぬをらぬ
言けよ衆のらりし少壯完
夜散のふ音むる二月ある
り居や一とあゝさる。露の面
下落や谷の朽るあゝ隙のあゝ
海草やや竹移りしははるを

故中師の録教ふし。柳のゆ
柳はよ梅きし厨の斗日や其の香
おろつらやそのも来ぬる香の中
尾袋はよほこり舞より其の物
我はよよ色ん競つよ洗ひ芥
雪のりなる露の是を
雨の持事よ人よ物也
人の誠ねもへま露の基其し
回文三行
ま川のまゆかすこはるたのあつま
口ぬあつたこくひまをさし初書たるを
しと志こはたりやうも知世事

同

しもの名ハあつハかきしし 意の事しと
事しを西を重しと名けし之を
春絲とゆん又ハ詩のよ
後を後茲よりありてお極
来風と碎言ととる則

お宮一柳ハ詩の古 小唄の事
赤人の名ハ甘き 永縁

中の事ハ他
春柳を衣通娘や 春の月
とハ口笛の事ハ和歌の事ハ他

抄題

